

Title	ゾムバルトの「プロレタリア社会主義」
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.4 (1925. 4) ,p.495(1)- 520(26)
JaLC DOI	10.14991/001.19250401-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時事新報

曾て卒先十二頁を發行した時事新報は
更に十四頁新聞の魁を致しました

讀者の増進と共に總ての階級有らゆる趣味を満足
させる爲めに紙面の拡張を感したからであります

紙幅の擴大と内容の充實せる
點を考ふれば一ヶ月定價

一圓の時事新報は最善

且つ最廉の新聞

であります

□ □ □

朝刊—十頁

夕刊—四頁

外に毎週漫畫附録



東京市橋本區 時事新報社 電話 東京 三三九六 五九三

三田學會雜誌 第十九卷 第四號

ゾムバルトの「プロレタリア社會主義」

小泉 信三

ゾムバルトの名著「社會主義及び社會運動」が根本的に改稿せられて、上下二巻の大冊となつて出た。Der proletarische Sozialismus(「Marxismus」) Zehnte neugearbeitete Auflage der Schrift „Sozialismus und soziale Bewegung“ I. Band Die Lehre. II. Band Die Bewegung (I. Teil: Chronik. II. Teil: Soziologie. III. Teil: Geschichte) Jena, 1924 がそれである。改稿は新材料蒐録のみの爲めに行はれたものではない。著者の近世社會主義に對する態度は、舊版に於けるものとは全然違つてゐる。舊版の扉に掲記せられた、Je ne propose rien, je n'impose rien: j'expose が削除せられたのは、偶然でないかも知れぬ。

第十九卷

(四九五)

ゾムバルトの「プロレタリア」社會主義

第四號

一

今や此書に於けるゾムバルトの態度は、獨逸精神獨逸文化の爲めに、西歐傳來の思想たるマルクシズムの虛妄無價値を高唱して獨逸國民を警醒せんとするものゝ態度である。

エンゲルスは或機會に我等獨逸社會主義者は管にフリエエ、サン・シモン及びオエンのみならず、又カント、フイヒテ及びヘゲルより出でたる事を誇りとする云ひ、又獨逸労働者運動は獨逸古典哲學の承繼者だと云つたことがある。併しマルクス主義者の立場よりすれば、近世社會主義運動社會主義思想は、如何なる國に特有なる哲學の産物でもなくて、文明諸國民に共通なる資本的生産方法の産物でなくてはならぬ。而して資本的生産方法は、生産力發達の一定段階に適應するものとして、必然的に出現しなければならぬものである。此見地より見れば、一民族固有の精神、一民族固有の文化といふが如きものは、僅に従屬的の意義を有するに過ぎぬ。此等の精神、文化は其自身生産力の發達に由て説明せらるゝか、然らざる迄もその社會運動に及ぼす影響は極めて限られたものでなくてはならぬ。否な

マルクシズムを極端に嚴格に解釋すれば、諸國民の文化には、資本主義長幼の別から起る先後の別のみがあつて、此以外に民族的特色なるものはあり得ぬ筈だといつても好いのである。ゾムバルトは決して無批判なるマルクス追隨者ではないが、併し近世思想家にして彼れに最も深き影響を與へたものがマルクスであつた事は、蔽ふべからざる所である。彼れはマルクスに據つて視、マルクスに據つて考へて、「近世資本主義」を書き、「社會主義社會運動」を書いた。固より意慾の對象と認識の對象とを混同する處に、「科學的社會主義の根本缺陷が存する事を、ゾムバルトは當初から指摘してゐたが、重要な幾多の點に於て、彼はマルクス、エンゲルスの所説を採用することに甘んじてゐたのである。社會主義は近世社會運動の精神的沈澱物だといふのがそれである。(エンゲルスは「プロレタリア」の理論的表現が即ち社會主義だと謂つて居る。)社會階級を分つて封建貴族、小ブルジョワ、ブルジョワ、及びプロレタリアとするものがそれである。資本主義の發達に連れて、諸國の社會運動はやがて統一せられんとする傾があると斷定したことがそれである。彼れは近世社會の本質に關する一切の智識は共産黨宣言に含まれてゐる。

るといふ評言の「實際に或程度まで正しい」ことを承認し、幾十年社會的事物の研究に没頭した者と雖も、常に豫期せざる未聞の新眞理を共産黨宣言中に發見する。予は既に幾百回之を讀んだ。而かも猶ほ再び之を手にすれば毎回新に之に惹きつけられる」と言つたのである。

然るに世界大戰はゾムバルトをしてその今迄閑却した世界史の他の一面に着目せしめた。獨逸が四面敵を受け、國を擧げて奮戦するに及んで、ゾムバルトが愛國の熱情は、彼をして獨逸人が特有の文化と特殊の歴史的使命とを擔ふ特別の民族なることを感せしめた。謂へらく、有ゆる大戰争は世界觀の衝突を意味する。今回の戦争も亦た獨逸に依て代表せらるゝ一世界觀と、英吉利に依て代表せらるゝ他の一世界觀との衝突に外ならぬ。聯合國の宣傳は、今回の大戰争がデモクラシーと野蠻主義との戦争であるといふ。詢に其通りである。ギョオテ、カント、フイヒテ、ヘゲルの後裔たる獨逸人は、佛蘭西革命に發する西歐羅巴の近代思想と戦ふものである。それは唯物主義と理想主義との戦である。權利を主張する商賈(Händler)と義務に服する英雄(Helden)との戦である。これがゾムバルトの HÄNDLER und HELDEN, 1915 に主張する所の大意であつた。

然るに「英雄」は「商賈」に征服せられて、外にはエルサイエ條約が締結せられ、内には社會黨の共和政府が組織せられた。ゾムバルトの獨逸民族を愛する情は、轉じて教養訓練なき *canailles* の増長を憎む情となつた。「支配權を掌握した民衆が、今日屢々犯して居る狂暴と罪惡」とは彼をして極度の反感を以てプロレタリア社會主義に臨むに至らしめた。一九一九年彼は *Grundlagen und Kritik des Sozialismus* の緒言中に記して曰く、「我國今日の狀態は、プラトンをして激して其の社會主義的ユウトピヤを作るに至らしめた衆愚政治のアテネ共和國の狀態と甚だ多くの點に於て類似して居る。唯だ最も重要なる相違は、恐らく當時人民集會に全く代表されてゐなかつた奴隷の大衆が今日では正に權力者となつてゐる一事であらう。併し乍ら、奴隷の暴動に直ちに社會主義理想の實現を認めることが、今日の最も不幸なる誤謬の一である」と (a. a. O. Bd. I, XI)。

社會主義の定義も改められた。それは最早「近世社會運動の精神的沈澱物」ではなくて、「反營利主義的傾向を有する實踐的社會合理主義」(praktische Sozialrationalistik mit

anti-chronatistischer Tendenz) と解せらるゝに至つたのである。更に詳しく言へば、社會主義とは人類社會に正義の理想を實現せんとする、理性より生れた努力で、此目的は、營利經濟に代ふるに無營利經濟を以てする時にのみ成就し得べきものなりとなすの點に於て一致するものだと言ふのである (p. a. O. VII)。既にこれだけを見ても、労働者階級は「實現すべき理想を有せず」と主張するマルクシズムが右の定義に吻合せぬことは、略ぼ推測されるが、ゾムバルトは更に進んで、近世社會主義に於ては、社會主義理想と、社會主義とは全く無關係なる有りと有らゆる異分子とが相混合されて居ることを明言して居る。所謂異分子の第一は、プロレタリアの解放努力、第二は社會進化理論である。社會主義的思想とプロレタリア思想との結合が甚だ密接なる爲め、近世社會主義を定義して社會運動の精神的沈澱物となすものもあつたのだが、より高い見地よりすれば、是は固より許容すべからざること、プロレタリアの階級利害が社會主義と何等の關係なきことは、それとブルジョワ階級利害との無關係と毫も擇ぶ所はない。又社會進化理論は決して社會主義と必然の關係あるものではなくて、社會主義者も非社會主義者も等しく採用し得べきものである。一定の社會的信仰、希望、心願、評價、意欲の表現たる社會主義は、社會科學と毫末も相關せざることには論を俟たぬ。此の三つの異分子——社會理想、社會理論、階級運動——が無理に外面的に一個のものに結合せられたのが、マルクシズムである。併しマルクシズムは元來社會主義ではない。マルクス主義者が社會主義者であれば、それはマルクス主義者たるが故にではなくて、別の理由からである。独自の特色を有するマルクスの社會主義なるものはないのである。ゾムバルトは大體右の如く主張するやうになつた (a. a. O. IXX)。而して彼れの近業の主題となるものは、一面に於て社會主義其者よりも狭く、一面に於て此より廣き此のマルクシズムである。

ゾムバルトが言はんと欲する所は、近世、プロレタリア社會主義は、『西歐』即ち古典・アングロサクソンの精神の刻印を擔ふもので、其の眞本質に於て非獨逸的のものなるの一事である。彼れはプロレタリア社會主義思想の思想史的系統を左の如き表に示してゐる。(Der p. S. i. Bd. 84)。

されば彼れが忍ぶこと能はざるは、時としてマルクシストの、僭して獨逸古典哲

プロレタリア社會主義は大體に於て

マルクシズム

獨逸社會主義者

Moses Hess, Weitling

英佛社會主義者

青年獨逸

Morely, Godwin, Owen

青年ヘーゲル黨

St. Simon, Fourier, Blanc, Leroux.

Feuerbach

Proudhon etc.

(Heine-Börne)

十八世紀の佛蘭西哲學

イエズイテン

カルボン主義

十七八世紀英吉利哲學

Hobbes, Locke, Shaftesbury
Mandeville

希臘衰頹哲學

猶太精神

學の後繼者を以て任ずることである。マックスアドラアは頻りにマルクスとカントの交渉を認めようとする。ゾムバルトは全く其理由を解せぬものである。「マルクスに批判主義の、否な二元倫理の形迹をさへ見出さんが爲めには、實に一マックスアドラアの希伯來法典學者の詭辯を要する。」ヘーゲルとマルクスとの關係を言ふには、多少の理由がある。「併し根本的には、彼はヘーゲルとは毫末も血縁がない。形而上學的に、本體論的に、歴史哲學的に、一言以て蔽へば、凡ての重要な點に於て、却て彼はヘーゲルと正反對に立つのである」(Bd. I, 79)。プロレタリア社會主義には獨逸精神の香りもないことを會得せぬものは、全く之を理解することが出来ないのである(81)。

然らば獨逸精神の特色は何處にあるか。獨逸精神の特色は、英吉利精神の經驗的、佛蘭西精神の合理的 (rationalistisch)、露西亞精神の神秘的、宗教的なるに對して、形而上學的なることに在る。西歐精神の獨逸精神と異なる所はその超越 (Transzendenz) を缺くことにある。然しプロレタリア社會主義にも哲學がないのではない。「ブルジョワ」啓蒙哲學がそれである。たゞ啓蒙哲學は、社會主義の基礎として用ゐるん

が爲めに一層粗野なるものにせられたに過ぎぬ。ゾムバルトは毒舌を弄して曰く「社會民主々義哲學」の「ブルジョワ啓蒙哲學」に於けるは、稍々下婢の服裝の淑女の服裝に於けるが如きものである。様式は後者が嘗て身に着けたのと同じであるが、たゞ今の着用者の粗野なる趣味と乏しき資力とに適合する丈けの差違がある。何よりも第一にそれは昨日の流行である」と(85)。

ギョオテは謂つた。「世界史及び人類史の眞に唯一最奥の問題は信仰と無信仰との衝突である」と。今獨逸精神とプロレタリア社會主義との對立は、ゾムバルトによれば、此の信仰と無信仰との衝突に外ならぬ。有信仰といふは、別に一の超越世界があつて、現世は其影像に外ならぬことを信すること、神を信じて神の信仰を此の地上に於ける一切行業の指針とすることの義に外ならぬ。管に啓示を信する者のみではない。凡ての理想主義的思想家及び詩人は、皆な此意味に於ける有信仰者である。分つべきものは啓示信仰と理性信仰と、保羅とプラトオとではなくて、信仰と無信仰と、即ちプラトオとフォイエルバッツハとである。而して純粹の

獨逸精神を體するものは、皆此意味に於ては有信仰である。獨逸古典文學、獨逸古典哲學は有信仰の文學哲學であつた。ヘエゲルは其歴史哲學の結論に獨逸古典哲學の精神を概括して言つた。「精神と世界史並に現實とを能く調和せしむるものは既に生起せる所のもの、又日常生活しつゝある所のものは、管に神なくしては生起せざるのみならず、其本質上神其者の業なりとの洞察是のみ」と。此精神と全然相容れざるものは、「無宗教、是れ我宗教。無哲學、是れ我哲學」と公言したフォイエルバッツハの立場である。マルクスはフォイエルバッツハに一步を進めたものである。マルクスの事業は、その唯物論の原理を擴張して人類の歴史に及ぼし、自然科学的唯物論の外に歴史的唯物論を立てたことに在る。神に對する信仰と共に人格不死不滅に對する信仰も失はれた。「神は不死不滅の前提である。神なくしては不死不滅はない。……自然は死を與へる。然し不死不滅は獨り神のみが之を與へる」(フォイエルバッツハ)。エンゲルスは謂ふ、「宗教的慰藉の欲望ではなくて、肉體の死後、一度び承認せられた靈を如何に處置すべきか……の當惑が一般に退屈なる人格不死不滅の想像に導いた」と。これがプロレタリア社會主義の精神的態

度である。然し神を忘れた者に愛はない。「神が愛を造り、愛が共同を、共同が文化を造るのである。神なくしては愛なく、共同なく、文化もない」(I, 250)。近世社會主義者の殆ど凡てに通有なる特色はその愛なきことである。而してその最も甚しきものがカアル・マルクスである。

ソムバルトのマルクスに對する評價の甚しき變動は、人をして一驚を喫せしめる。之を讀む毎に新なる未聞の眞理を發見せざることをなしと言つた「共產黨宣言」は、今日人の知る如く、全く何等の新しき思想を含まぬものとして正しき思想を含まずして全然謬れる思想を以て充溢せるものとなつた(Bd. II, 328)。マルクスの人物に對する其批評も頗る苛酷である。マルクス性格の特色としてソムバルトが列擧する所は、學問的稟賦、激情的支配慾、政治的能力の缺乏、否定的攻撃的性情及び憎嫉(Ressentiment)の五である(Bd. I, 65-74)。マルクスは直接生活に接觸せぬ讀書人(Büchermensch)であつた。常に書籍が彼れと世界との間に中介した。然るに此讀書人の裡には烈々たる激情の火が燃へてゐた。此激情は發して事業慾とな

つた。更に又彼れの異常なる意志力と精神的能力とは、發して彼れの支配慾、權力慾となつた。彼れの性格の特色をなすものは、敵に對する憎惡と報復慾、競争者に對する羨望と嫉妬、從隨者に對する君主感、人類一般に對する深き輕蔑である。而かも此巨人的人物の生涯は失敗の連続であつた。家庭生活に於ては、彼れは入質とエンゲルスへの無心狀との間を彷徨してゐた。その發行する新聞は、何れも間もなく廢刊に歸した。その生涯に唯一の稍、大なる事業たりし國際労働者協會も、數年を出でずして不面目なる終局を告げた。而して彼れが望を繋げた最後の骨牌も失敗に終つた。「資本論」の世界革命的影響を、彼れは見るとに及ばずして逝いたのである。此等の失敗には、彼自身の政治的能力缺乏の罪に歸すべきものもある。併し彼れの際限なき自負心は、之を容認することを許さない。彼は悉く之を境遇の責に歸した。彼れが一身の困窮、彼れが一切の失敗を悉くブルジョワ社會、就中普魯西に嫁した。其處で彼れの感情は益々毒せられた。精神的破産を防がんが爲め、彼れは己れを救いた。己れ一人を重要な人物とし、他を悉く愚人とする性癖は益々昂じたのである。彼れに従へば、彼れ以前の經濟學者は皆昧者である。

ビスマルクは無能なる小エンケルである。ラッサアルの煽動文書は中學六年生の剽窃で、一讀の勞に値せぬものである。斯く他人、殊に何事をか成し遂げた他人の價値を傷けることに、既に彼れの人物の他の一面が現れてゐる。彼れの憎悪若しくは惡意 (Gehässigkeit) がそれである。憎悪と懷疑癖とは相合して批評を生み出した。憎悪と批評とは彼れをして辛辣なる毒語を用ゐしめた。此精神状態は現れて「心理的悲觀主義」となつた。歴史の進行は畢竟人間の惡しき一面が善き一面を克服することに外ならぬと見るのである。憎嫉 (Resentment) はマルクスが他の幾多社會主義者と分つ所である。憎嫉は安心立命を得ぬ所から起る。併し同時にそれは自己の道德的創造力及び、マルクスにあつては、更に政治的能力に對する自信の缺乏と密接に結び付いて居る。此の自信の缺乏は、マルクスをして定命論 (Fatalismus) に陥らしめた。併しマルクスの定命主義は、クロムエル、ワルレンシユタイン、ナポレオン又はビスマルクの定命主義とは趣を異にする。彼等の定命主義は、より、高き意志の手中の用具たることを自覺する所から生ずる。即ち信仰が其基礎となつてゐる。之に反しマルクスの定命主義は不信仰に基づいてゐる。

畢竟絶望して責任を自然力に嫁するといふに外ならぬのである。

マルクスに對するゾムバルトの無假籍なる批評は、また其「亞流」にも及んでゐる。最も憤激せる社會主義者は最も甚しき憎嫉の念を抱くものだといふ例にロオザ、ルクセムブルグを擧げて、彼女は「獨逸に於ては」四重の憎嫉に惱まされてゐる。「女子として、外國人として、猶太人として及び不具者として」といふの類である。(176)。

嘗てマルクスの文章の猛烈噴火山に比すべきを嘆賞したゾムバルトは、今や其毒惡に厭惡の感を催してゐる (170)。然し變つたのは、其の文章に對する評價のみではない。マルクシスト等が解する意味に於ける「科學的社會主義は、之を純論理的に考察すれば、四角の圓といひ、黄金製の蹄鐵といひ、倫理的物理學といひ、感情に満ちた化學といふの不合理に等しい。科學的社會主義なる語は「社會主義」が一の認識問題なることを意味するのであるから、それは認識と行動と、必然の王國と自由の王國と、回顧と前望となる二つの存有領域の論理上不可能なる混同から生じたものだ」と謂ふのは (1, 299) ゾムバルトが昔から主張してゐた事だが、彼れが階

級闘争説を否認することは、吾々の豫期しなかつた所である。ソムバルトが見る所では、マルクスの階級闘争説は冷静なる科學的認識たるよりも寧ろ大部分彼れの熾烈なる政治的意志の表現と見るべきものであつて、此處から其の矛盾曖昧不明確が生ずるのである。マルクスは一定の經濟制度に屬することを標準として、ブルジョワジイ、小ブルジョワジイ及びプロレタリアを分つた。併し此の階級論の第一の缺陷とすべきは、一國人民中最も重要にして、多くの場合最も多數なる集群、即ち農民を度外してゐることである (I, 371)。次に不明確なのは「階級利害」の概念である。階級利害とは何か。此の「利害」は個々の階級成員に取て超越的なものであつてはならぬ。若しさうであつては、利害は個々人に取つて一のイデオロナリ、階級利害の爲めに戦ふことは、マルクシストの立場からは許し難いイデオロナリ奉仕になる。「故に『階級利害』は少くとも個々人に取ても内在的のもの、即ち彼れの個別利害でなくてはならぬ」。然るに個々人の利害は、種々様々である。そこでプロレタリアの「正しき利害」といふ事を言へば、果して誰の目から見ても「正しき」利害なるかの難問が起る。「共產主義の理想をプロレタリアの『正しき』利害と同一

視することは *difficult* に過ぎぬ (I, 373)。プロレタリアの階級的共同意識の發生を妨げるものには、職業上、經營上及び個人的なる様々の特殊利害がある。併し假に労働者の階級意識が充分發達して、共同して其階級の利害を主張するに至つた場合に於ても、此利害其者が却て社會主義的労働者運動の發生に對する妨害となることがある (II, 165)。例へば近年に至るまでの英米二國に於けるが如く、労働者の經濟上政治上の利害が却て社會黨の組織を阻止する場合がそれである。

國家といふ國家は皆な階級國家だといふ説も、ソムバルトは承認しない。唯物史觀の立場から云へば、支配階級は即ち經濟上の支配階級、即ち現在の文明諸國に於てはブルジョワジイでなくてはならぬのに、歴史上の事實を見れば、此の「支配階級」は、必しも常に「支配階級」でないからである。ルイ・ナポレオン當時の佛蘭西、十一月革命以前の普魯西獨逸に於ては、ブルジョワジイは「支配階級」ではなかつたのである (I, 374)。「既往一切社會の歴史は階級闘争の歴史である」との命題も同様である。此命題を證明しようとするれば、演繹的方法によつても、歸納的方法によつても、結局形而上學に落着かなければならぬといふのである (I, 376)。

そこでソムバルト自身嘗て主張したやうに、プロレタリア運動は、直ちに社會主義運動たるものではない。「社會主義は、常にプロレタリア階級利害の思想的反映たるのみならず、一部分階級利害の圏外に存する其の特有の根柢を有するのである(II, 168)。これは反面から見れば、近世社會主義運動に取つての、非プロレタリア分子の意義は重大である」と言ふことに外ならぬ。然らば此等非プロレタリア分子をして社會主義者たらしむる動機は何か。第一は宗教的、倫理的、藝術的動機、即ち概括すれば、理想への奉仕である。第二は同情である。第三は世界及び人類に對する否定的感情である。一切の不満は此に屬する。己自身に對し、妻に對し、子に對し、上長に對し、國家に對し、失敗に對し、世に認められざることに對する不満は、或事情の下では、人をして政治上の反對者、即ち今日では社會主義者たらしめる。此不満が激情的人物にあつては、嫉妬、猜忌、憎悪となる。嫉妬と憎悪との謂は、開化せる形態が *Resentment* である。不満と憎悪とが積極的の形で現れると反對慾更に進んでは破壊慾となる。第四は利己心に發する様々の動機である。(イ)純然たる業務上の利害。社會主義的書籍新聞の出版者が社會主義を奉ずるが如きは

是である。(ロ)資産没收の危険を免れんと欲するの念が屢々富豪をして社會主義者たらしめる。(ハ)感覺慾が往々人をして身を革命黨に投せしめる。即ち色食の樂に耽り、阿片コカインを喫用すると共に政治上の過激主義を弄ぶのである。(ニ)功名心。功名心と *Resentment* との結合は、ラッサアルに於て典型的一例を見る。

(ホ)有ゆる種類の偏執狂的世界改良家は、屢々其の可能秘法を實行する機會を獲んが爲め社會主義運動に参加する。第五は、思想的流行病感染である。「朋友同胞が社會主義に改宗し、社會主義宣傳が到處に行はれると己れも亦社會主義者となる」。第六は傳統である。(イ)社會主義者は情性で社會主義者たることを續けてゐるといふ事がある。(ロ)一度社會主義者となつたので、足を洗ひ度くても洗へなくなつてゐるのがある。(ハ)社會主義者の子が社會主義者になるといふ事がある。ベエベル、リイブクネヒト、井クトル・アドラアの子等の場合がそれである。

然らば此等の動機に依て動かされて最も社會主義運動に参加し易いものは何人等であるか。それは(一)青年(二)廢類人物、精神病者(三)外國人(四)一階級の籍を削られたるもの(バクウニン、シュヴイツェル、オスカア・ワイルド等の如き)(五)女子殊に(六)

猶太人である。ゾムバルトが此列挙をなすに當つて批判を交ちへ感情を交ちへてしてゐることは、例へば女子が何故に社會主義運動に投ずるかを説明するに當つて「純粹の婦人は保守的である。……然るに純粹の婦人は今日では、『近世的』婦人、即ち解放せられたる婦人、『自由なる』婦人、『政治的』婦人、『同伴』と稱する奇妙なる創造物の爲め益々壓倒せられてゐる」と謂ふに徴して明である(II, 151)。

此のゾムバルトが近世議院政治の醜陋を憎むのは、異しむに足らぬ。議院政治其者を排斥するのではない。無産者の大數に選舉權が賦與せられて、本來貴族的なる「議會の様式」の破壊せられ、選舉が「無良心なるデマゴグとボツスとの唾棄すべき業務」となつたことを憎むのである。貴族的議會の民主的議會に優れる實例を示さんが爲め、彼れは戦前の普魯西貴族院と獨逸帝國議會とを比較して居る(II, 250)。

同じゾムバルトが社會黨の領袖は皆なデマゴグだといふのも亦た同じく不思議ではない(II, 279)。デマゴグの反對極をなすものは眞の指導者(echte Führer)である。眞の指導者とデマゴグとは何處が違ふか。少しくゾムバルトの謂ふ所を誇張すれば、眞の指導者たり得るものは、たゞ獨逸精神を奉ずるものゝみである。換言すれば、眞の指導者は有信仰者である。神に命せられて、其意志を地上に行ふものたる自覺を有する人である。之に反してデマゴグの活動は、超世界的威力と何等の連繫を持つてゐない。彼れの目的は、純合理的秤量に基づいて、主として一身の利害に依て決定される。そこでデマゴグには、其人格にも活動にも温みが缺けてゐる。此の温みは、超世界的理念界との結合に依て始めて生ずるのである。信仰なくして愛はない。「眞の指導者を其國民(Volk)と合一せしむるものは愛である。デマゴグを其民衆(Massen)と結付ゆるものは、共同の敵に對する憎悪である。」眞の指導者は常に上方に、光明に導く靈の力に訴へ、建設的、積極的、共同形成的本能と感情とを醒覺せしめるが、デマゴグは、低卑なる激情に訴へる。人間胸裡の賤民に、嫉妬、憎悪、渴望、利己心に訴へる……。眞の指導者は、その率ある者の精神的、道德的、水準を高め、デマゴグは之を低める。前者は「人をして其の狭隘なる私を超越せしむることに依て、之を解放し、後者は個人的欲情と快樂との鐵

鎖に繋ぐことに依て、人間を奴隸たらしめる(II, 274)。

ツムバルトの思想とプロレタリア社會主義とが根本的に相容れぬことは、これで充分明白になつたであらう。プロレタリア社會主義中の最もプロレタリア的なるものは共產主義である。されば彼れが諸國の共產主義者を罵るに當つて、毫も其筆に檢束を加へないのは當然である。彼れは諸國共產黨がソビエト露西亞から財政的援助を受けてゐる事實を指摘し、併し假に事實上の證據がなかつたとしても、彼等諸國共產黨の露西亞本部に對する卑屈なる態度に徴して斯く論結しなければならぬ」と謂つて居る。共產黨首領等が若し經濟上にも依頼する所がなければ、彼等が露西亞人から蒙つてゐるやうな屈辱的な待遇を甘んじて受ける筈がないといふのである(II, 449)。

さて勞農露西亞其者に就いては何う云ふか。固よりツムバルトは、民衆は指導せらるべきもので指導すべきものではないと信じてゐるのだから、露西亞の實質上の政體は、レニンの生前には絶対君主制で現在に於ては專斷執政官制だといふのは(II, 460)必しも貶毀の意味を含んで居らぬかも知れぬが、今日も猶ほ、「ポルシエ」政府の施設といふ施設は、皆なそれが五十萬人の共產黨員、更に嚴密に謂へば、廿五人の領袖の權力位置を果して強固ならしめるか否かの見地からのみ考察せられてゐる、而してその然る場合にのみ採用せられて、その果して共產主義的特色を帶ぶるものなるか、資本主義的特色を帶ぶるものなるか、その民主的精神に出づるものなるか、專制的精神に出づるものなるか、其の公益に利あるか、害あるかを問はぬに至つては、固より「有信仰」なるツムバルトの許すこと能はざる所であらう。彼れが露西亞革命當局者の有ゆる偉大高貴美麗なるものを貶しめて卑小低賤醜行なるものと同列に置かんとするを見て痛憤禁せず、之に對して下した辛辣なる批評には、一種の雄辯の自ら人の耳を傾けしめるものがある。

「權力者(勞農露西亞)自身が其事業に満足してゐることは、異とするに足らぬ。彼等の榮達は誠に赫々たるものである。猶太人廓(Ghetto)の陋巷、若しくは外國の亡命客珈琲店を出で、クレムリンの華麗なる房室に入り、卑賤なる三文記者の地位を去つて光榮ある歐洲最大國の支配者となる。是は如何に熾烈なる功名心を

も満足せしむるに足るものである。

「併し共產主義を信する大衆にも、亦たボルシエギズムが惡魔の仕業なることを納得せしむることは出来まい。彼等は吾々がそれを認めず、又其の全く存在することなき處に價値を認め、又未だ依然として信仰希望に満ちて居る爲めに、様々の缺陷を看過してゐるのである。彼等に向つて、共產黨支配の下に於て、道德上審美上露西亞は豚小屋と化した……と云へば、彼等は答へて曰ふであらう。それが正しく吾等の望んだ所であると。加之彼等の此判断は露西亞プロレタリアル及び農民幾百萬人の間に反響を見出すのである……」

「之れが正しく吾等の望んだ所のものである。ブルジョワ的の意味に於て神聖高貴美麗高尚と認められたる凡てのものは破壊せられて、最早や何等の大なるもの、高きものなく、最早何等の上下はない。凡てが下である。それは當さにさうでなくてはならぬ。吾々は低處に存せざるものには全く與かることが出来なかつたから、又何人もそれに與かることを得てはならぬ。吾々凡てが學者たることは得なかつた。故に學問をなくなさなければならぬ。吾々凡てが伯爵にはなり得

なかつた。故に伯爵をなくなさなければならぬ。吾々凡てが宏壯なる邸宅には住むことが出来なかつた。故に宏壯なる邸宅はなくなさなければならぬ。吾々凡てが純潔ではあり得なかつた。故に凡ての者が穢汚でなくてはならぬ。吾々は神を信することが出来なかつた。故に他人も亦神を信じてはならぬ。此論法は、吾々がプロレタリア社會主義の理論的考察によつて充分知了する所であるが、此に吾々は實際の心情として、活きて作用する勢力としてのそれに遭遇するのである。」(II, 491)

ズムバルトが論ずる所は頗る多岐に亘つてゐる。然し其書全篇を通じて唱歌の refrain の如く、常に繰返して説かるゝものは、憎惡に對する愛、無信仰に對する信仰、フオイエルバツハに對するプラトオである。而してズムバルトが説く所に從へば是は畢竟西歐精神に對する獨逸精神に外ならぬ。彼れは曰ふ、プロレタリア社會主義者は、人性を誤認して居る。彼等は我等が信仰なくしては一日も生活し得ざることを認めて居らぬ(1, 225)。マルクシズムに對する彼れの批評は、畢竟此

一語に盡さるのである。而して此結論は論の發途に先だつて既に與へられて居る。彼れの頗る豊富なる引證にも拘らず、「プロレタリア社會主義」が學問的著作よりも Tendschrift たるの嫌を免れないのは、此が爲めである。或は此を目するに一篇の抒情詩を以てする者があつても、それは甚しい妄評ではない。而して本篇の始めに記したやうに、ゾムバルトの右の傾向は、既に開戦後間もなく著された *Handler und Helden* に現れて居るから、彼れの近業も或意味に於ては世界大戰の産物だと謂つて好い。世界大戰は獨逸の公認マルクシスト中にも、幾多の、或はマルクシズムに對する信仰を薄くし、或はマルクシズムと所謂獨逸精神との調和に腐心するものを出でしめた。ゾムバルトは穿鑿と推究とに没頭する學究ではない。彼れが言ふ事は、當否如何を問はず、彼れが言はんと欲することである。往日マルクス心酔者たりし彼れをして今やマルクシズムには殆ど一も取るべき所なしと言ふに至らしめたものは、研究の進歩ではなくて、ゾムバルトの裡の感情の嵐とも謂ふべきものである。

生産消費の均衡に關する論争

(セイの市場理論を中心として)

増井幸雄

私は嘗て、一般には Adam Smith の經濟學說を通俗化して經濟學に形態を與へ之を普及せしめたる功勞者なりとして知られて居る Jean-Baptiste Say は、大體に於て Smith の祖述者と認めらるべきことは疑ないが、而も個々の點に於ては其の所説は Smith の上に出で、斯學の進歩に貢献する所決して少なからざりしものであると云ひ、幾多の經濟學者並びに經濟學史家は Say の最大の貢獻たり榮譽たるものとして其の市場理論 (*Théorie des Débouchés*) を擧げて居ることを指摘し、且つ、それは Say 自身にとつては頗る得意とする所のものでもあり、又、其の經濟政策上の意見の基